

当たり前過ぎて誰も気に留めない事、あるいは物……それこそが同時代性だが、それを明るみに出すことは最も反時代的な行動を強いる。しかしこうしたパラドクスを認め、その系譜を描き出すことを可能にしたのが「コンテンポラリーアート」という概念であるならば、高見澤峻介の活動ほど適した例は今日存在しないだろう。

なかでも発電をメディアとした作品は、電気の物質的な側面を露出させることで、イメージが現れることの意味を私たちに問いかける。『Fire Display』(2019~)において彼は、温度差によって電圧を生じさせる「ペルチェ素子」という電子パーツを用いて小型のコンピュータを駆動させ、イメージを灯した。熱を持つと同時に光を放つ炎。その熱は電圧へと変換され、光はディスプレイのバックライトを代替する——冬の冷気と蝋燭の炎の間で電子の運動がはじまった。

だがインディペンデントな発電行為が、彼の活動を特徴付けるのではない。まず彼は様々な場所から集めた電子パーツやアルミ缶、蝋燭、ボルトなどをブリコラージュする。それはひとつの「器官」(organ)となり、最後には閉じた回路のなかを巡る電子がイメージへと変質するのだ。彼は発電を用いて、イメージのリアリズムを探求する。それこそが彼の活動を貫く問いだ。

そして2019年の個展『Screening Organon』(四谷未確認スタジオ, キュレーション:布施琳太郎)において彼は、自ら作った電気をを用いてウェブサーバを立ち上げた。展示会場を這う透明なホースのなかを流れるエアコンの排水、そして目の前で揺れる蝋燭の炎。その温度差によって作られた電力に、鑑賞者はワールド・ワイド・ウェブを介して自らのスマートフォンでアクセスする——その刹那、この手のなかにあるものもまた、ひとつの器官であることに私たちは気が付くだろう。本展ではアップデートされた本作が展示される予定だ。

彼の活動はプリミティブである。しかしそれは野蛮さとは無縁の、知性の誕生の瞬間に立ち会う感動を意味する。極度の緊張状態のなかで安定した電圧が生じ、私たちのそれぞれの手のなかにイメージが現れる。それは集団で焚き火を囲む際の、息を飲むような一体感の等価物だ。高見澤峻介の活動はプリミティブであるが故にイメージと直面することの感動へと私たちを導き、今日の社会を基礎付ける下部構造の物質性を露わにする。そこにはイメージが「ある」という確かな手触りが待っているだろう。

布施琳太郎